

ぼっちと孤独

2023年5月下旬、長野県で起きた立てこもり事件に関する報道が連日続いていた。この事件を起こした男の供述の中にあった「ぼっち」という言葉が、なぜだか耳にこびりついて離れなかった。

事件が起きたのは、5月25日の夕方ごろ。散歩中の女性二人が突如として刃物で命を奪われ、駆けつけた警察官二人までもが犠牲となった。犯人は「二人が話しながら散歩しているとき、自分のことを『独りぼっち』とバカにしていると思った」と供述している。また、男の母親は「大学時代に『独りぼっち』と言われていじめられ、そのことばに過剰に反応するところがあった」と話しており、かつて男は自身の勤務先でも、店を手伝っていた学生らが雑談で「東京では、ぼっちだね」と話すのを聞いて、「俺がぼっちとばかにし

た」と激高するなどのトラブルを起こしていたことが分かっている。

彼は、いかにして孤立してしまったのだろうか。

しかし彼の生活は、社会から疎外されたものではなかった。彼は両親とともに暮らしており、仕事にも就いていた。人との接触が極端に断たれていたわけではなかったのだ。それにもかかわらず、「ぼっち」という一言は、彼の内に潜む深い痛みを激しくえぐり出したのだ。

彼の耳には「ぼっち」という言葉が、どう聞こえたのだろうか。

わたしにも思い当たる節がないわけではない。確かにここにいるはずなのに、自分だけが見えない存在にされている感覚。誰かの言葉や視線から受ける無言の拒絶感。外見上は孤立していないにもかかわらず、そ

の存在が承認されていない虚しさが「ぼっち」という言葉と結びつく。

家族がいても、同僚やクラスメイトがいても、ぼっちという言葉に胸を締め付けられることは想像に難くない。

では、「一人ぼっちではない」「わたしには○○がいる」という安心感は、どんな条件が揃ったときに成り立つのだろうか。言い換えれば、私たちはどうすれば「孤独ではない」と実感できるのか。

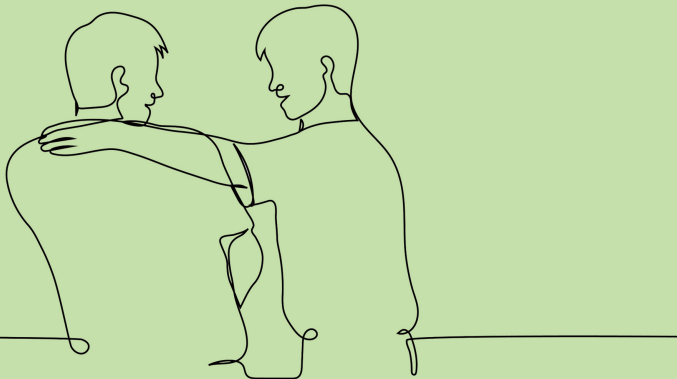
2018年より、政府は「孤独・孤立対策担当大臣」を設置し、「望まない孤独」の解消を急務としている。孤独を、解決すべき問題とみなしている。

しかしその一方で、仏教や哲学という営みは、必ずしも孤独を悲観なものとして扱わない。人間はそもそも孤独な存在であると示し、自己の当事者性を端的に示す事実認識であると説く。もし孤独を問題として捉えるならば、まずはその言葉が持つ多義性を解きほぐし、なぜ問題と感

じるのかを明らかにする必要があるだろう。

本号では、「ひとりであること」

の意味を整理しながら、孤独をどう受け止めるかを探っていく。本号が孤独と向き合うための足場になればと思っている。



ぼっちと孤独

(寄稿)

寂しさと孤独と、「弱いお節介」

——『ぼっち・ぎ・ろっく!』、「日本怪奇ルポルタージュ」、「スマホ時代の哲学」 …… 03

孤独を持ち寄る …… 15

(連載)

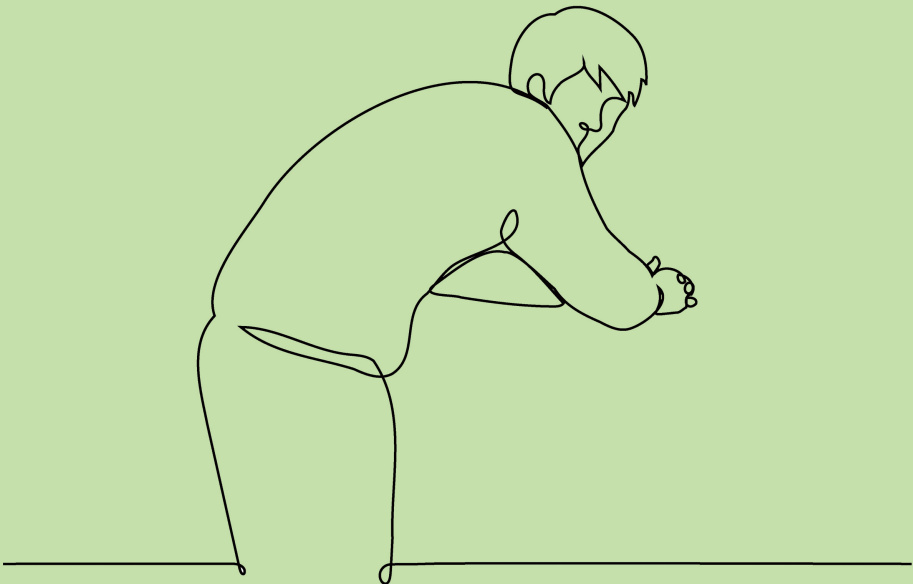
私道かびの日々人其々 …… 23

(その他)

孤独の周辺 Map …… 13

坊主が並んで (写真) …… 21

西蓮寺通信 …… 26





== PROFILE ==

谷川 嘉浩 / Yoshihiro Tanigawa

哲学者。1990年。京都市立芸術大学美術学部デザイン科講師。著書に『増補改訂版 スマホ時代の哲学「常時接続の世界」で失われた孤独をめぐる冒険』、『人生のルールを外れる衝動のみつげかた』、『ネガティヴ・ケイパビリティで生きる』など。好きな漫画家は、ヤマシタトモコと九井諒子。

Contributed article

寂しさと孤独と、「弱いお節介」

——『ぼっち・ぎ・ろっく!』、『日本怪奇ルポルタージュ』、『スマホ時代の哲学』



哲学者

谷川 嘉浩

▼世代や地域を超えて広がる孤立感

「私なんか、あの指に止まっていけないのかな? そう悩んでるうちに乗り遅れて、気づいたらひとりぼっちな子。部活も入らず、放課後は即帰宅。スマホに届くのは、親からのメッセージか、クーポンのお知らせだけ」

これは、2023年にヒットしたアニメ作品『ぼっち・ぎ・ろっく!』の冒頭に登場するセリフだ(原作は同名の漫画)。このセリフは、主人公・後藤ひとりのモノローグにあたる。一人ぼっちでいることについての、この複雑で切実な思いが痛切に感じられるのは、上記の台詞に続いて、「それが私」と諦めたように言いながらも、「たまう」思う、このままでいいんだろうかって」とも口にしてるからだ。後藤ひとりとは望んで一人であるわけではなく、一人であることに耐えられないと考えているのに、孤立を避けられないでいる。こういう孤立感の問題が日本社会で表面化したのは、NHKスペシャルのドキュメンタリー「無縁社会〜無縁死、3万2千人の衝撃〜」が2010年に放映された辺りだろう。このドキュメンタリーは反響を呼び、多くのテレビや雑誌で関連する特集が組まれ、流行語大賞にも選ばれた。

無縁、つまり孤立や寂しさの問題は、国内に限った問題ではなく、世界的に

社会課題とみなされている。2018年に当時の英国首相テリーザ・メイによって「寂しさ担当大臣(Minister for Loneliness)」が新設されたことは話題を呼んだ(後の内閣改造で廃止されたが)。また、パンデミック中の2020年1月に公開されたCigna社のレポート「寂しさと仕事場: 2020年アメリカの報告書(Loneliness and the Workplace: 2020 U.S. Report)」によると、1万人以上の成人に調査した結果、5人中3人のアメリカ人が「寂しい(One M)」と感じているだけでなく、その寂寞が各人の仕事のパフォーマンス実感に影響しており、寂しさのあまり仕事を辞めたいと思っている人も多数いるとのことだ。

▼孤独と寂しさの区別

筆者である私も、この社会現象化した孤立や寂しさの問題系の延長にいます。2022年に『スマホ時代の哲学』で失われた孤独をめぐる冒険』という書籍を出し、寂しさ、孤独などの論点についてスマートフォンを絡めながら論じた。こういう本を書いたくらいだから、おそらく私自身、後藤ひとりのモノローグに共感的なのだと思う。彼女のような極端な孤立状態にはないが、自分が誰かと本質的につながれていないのではないかという根深い不安には心当たりがある。

こういう論点に憑かれた人として社会を見渡すと、孤独や孤立、寂しさをめぐる議論はあちこちに落ちていることに気づく。その議論は多様そのものではないえ、一定のパターンを見出すこともできる。たいていの議論は、大体次のようなパターンで展開されている。

一人であることの価値そのものは否定できないし、そういう静寂で内省的な時間は現在において確保しづらい機会になっているかもしれないが、孤立状態や排除、差別によって生み出される不安や焦りを伴う状態は、真剣に向き合うべき社会的／哲学的な課題である。



▼『ぼっち・ぎ・ろっく!』
(芳文社)

▼『増補改訂版 スマホ時代の哲学「常時接続の世界」で失われた孤独をめぐる冒険』
(ディスカヴァー携書)



▼むなしく過ぎる者

自分の為すことや自分の存在に意味や役割が見えないとき、ひとはむなしさを覚えるものだ。

5世紀頃のインドに世親(せしん)という有名な僧侶がいた。彼が書いたと言われている『浄土論』という書物には「空過者」という表現が出てくる。空しく過ぎる者、つまり生涯をむなしく終えていく人間の課題が仏典で示されている。ここでは「孤独」と密接に関連していると思われる「むなしさ」について、人はそれとどう付き合っていくべきかを、仏教を参照しながら考えてみようと思う。

浄土教に親しむ者として、孤独と聞いてまず最初に思い浮かぶのは、『仏説無量寿經』というお経の次の一節である。

人、世間の愛欲の中にありて、独り生まれ、独り死し、独り去り、独り来たる。行に当り、苦楽の地に至り趣く。身、自らこれを当(う)くるに、有(たれ)も代わる者なし。

わたしなりに訳してみると、「人はみな世間の情にとらわれ、欲するものに手を伸ばし嫌悪するものを遠ざけようと生きている。どれほど多くの豊かさを握りしめたとしても、結局人はどこまでいってもたった独りで生まれ、たった独りで死に、たった独りで去り、またたった独りで来たるものである。自分自身の行いによって生じる苦悩や快楽は、他ならぬその身が引き受けて生きるものであり、それを誰かに代わって引き受けてもらうことなどはで

きない」といったところだろうか。

生まれてくるときも死にゆくときも独り。縁によって人と出会うときも、別れた後も、人はいつも独りなのだという。「孤独」と聞くと、誰とも関わることなく一人ぼっちでいる状態をイメージするかもしれないが、仏教の文脈における「独り」とは「自らの生を生きる当事者は自分以外にはありえない」という私たちの存在を表す「事実」を指した表現である。

では、絶対的な個としてのわれわれから、どのような生の指針が引き出されるのかについて考えてみる。

ドイツの哲学者・ハイデガー(1889-1976)は、われわれ人間の存在のことを「被投企的存在」と表現したそうだ。われわれは自らの意志とは関係なくこの世界にポイツと「投げ出された」存在であり、誰一人として自分で生まれてこようと思っただけで生まれてきたわけではない。気づいたら「このへわたし」として「生まれていた。つまりこのへわたし」という存在は、生きることや死ぬことの意味を、あるいはその目的を、自らの内に抱え込んで生まれてきたわけではなく、今ただこうして存在しているだけだということである。

しかしここで問題となるのは、人は「自分の存在の意味がわからないこと」に耐えられないという点である。もし自分がこれまでやってきたことが、誰のためにもなっていないか、と考えると、想像しがたいむなしさを覚える。そのむなしさから逃れるために、自分のやっていることを意味付けたり、問い続けたりしながら生きていく。私たちが人生と呼んでいるのは、そうした営みの総体のことではないかと思う。

浄土真宗僧侶である松月博宣氏は、私たちが自ら意味付けた人生の意味の不安定さについて論じている。それを、現代の私たちの生涯を3つに区分しながら話してくれた。

▼現代人の三住期

古来のインド社会では、四住期といって、人の生涯を4つに分類する考え方があった。それに倣って日本の現代社会で経験する人生のステージを3つに分類してみると、人は必ず自身の根底にあるむなしさに直面する。

1つ目のステージは親の庇護や社会的な保護の中で生きていける時代、つまり子ども時代のこと。もちろん子ども時代にも色々な悩みや生きづらさはある。けれども他者からの庇護や社会的な保護のもとでなんとか生きていくことができる。

Contributed article

孤独を持ち寄る



== PROFILE ==

小西 慶信 / Yoshinobu Konishi

本誌の編集部員。1992年生まれ。お寺の中にひっそりと編集部を立ち上げ、仏教講座や本誌の企画や制作などを担う。最近はオクラが美味しいと感じている。